シンポジウム

ヴォランタリズムとジェンダー
――文学と歴史の境域――

大石　和欣

1　家庭伝道協会と『メアリ・バートン』

クロス・ストリート・チャペルは19世紀のマンチェスタにおいてユニタリアン派の重要拠点であった。そこに家庭伝道協会（Domestic Mission Society）が設立されたのは1833年のことである。貧窮のどん底にある人びとにキリスト教の信仰を伝道すると同時に生活救済を目指したヴォランタリ・アソシエーションである。牧師補であったウィリアム・ギャスケル（William Gaskell）は1840年からこの協会の事務局長を務めることになる。彼にとってこの活動は、「健全で有益な道徳的・宗教的知識」を広めることで、若者たちの精神を「純化し、進歩させ」、「公正と真理を促進する」というユニタリアン派の信条にかなうものであった（Gaskell, 1843, p.8）。

フリクシュテッドらの研究により、エリザベス・ギャスケル（Elizabeth Gaskell）は夫を通してこの協会の年報を読んでいたことがわかっている（Fryckstedt, 1982, pp.90-97）。マンチェスタの労働者の困窮ぶりと彼らが政府や行政、雇用者、教会に対して疑念と不満を抱いていることを記した1842年の年報が、そのまま『メアリ・バートン』のなかに剽窃されている（*Eighth Report*, 1842, pp.19, 34-35; Gaskell, *Mary Barton*, 2005, p.75）。小説においては、いわゆる「飢餓の40年代」を記述した八章の冒頭付近にあたる。このことは、ギャスケルの小説が「産業小説」としてだけではなく、ユニタリアンたちの慈善小説、ヴォランタリズム小説として定義できる可能性を示唆している。

2　ユニタリアンの信仰とギャスケル夫妻

ユニタリアンたちは合理的な知性と精神をもち、啓示神学、聖書解釈学に加えて自然神学も重んじ、人間精神の啓蒙と進歩をかたくなに信じた。その根底には、原罪や贖罪を否定的にとらえ、人間および社会は潜在的に改善、改良へと前進しうると考える進歩的ヴィジョンがある（Michael R. Watts, 1995; Hall 1932; Webb, 1986, pp.1-30）。政治的には自由党寄りであり、選挙法改正、自由放任主義、人口論、救貧法改正を支持し、富裕な市民層を信徒に持っていた。マンチェスタではグレッグ家など産業資本家、市制改正後最初のマンチェスタ市長になったトマス・ポッターなどの有力市民が信徒である。

公共心、公平無私、普遍的仁愛（博愛）、真理を強調し、「任務を伴う信仰」（faith with works）を強調する彼らの信条はウィリアム・ギャスケルの言説にも顕著である。彼の宗教的立場はプリーストリなど 18 世紀末のユニタリアン信仰を継承している（Webb, 1988, pp.144-71）。説教において、真理あるいは真実（truth）を重んじると同時に、公平無私、率直さ（candour）あるいは寛容さ（openness）、さらには公共心（public spirit）や博愛（philanthropy= 普遍的仁愛 universal benevolence）といった 18 世紀の理性的非国教徒（Rational Dissent）に特徴的な美徳を顕彰する（Gaskell, 1869, pp.11-12; Gaskell, 1858, p.10)。政治や経済について公共の場で発言することは避けていた彼だが、市民活動に関して「良心」（conscience）と「責務」（duty）を訴えるのは、このユニタリアン文化に根差したものである（Gaskell, 1858, p.11）。

同じ傾向はギャスケル家と交流が深かったリヴァプールのユニタリアン牧師ジョン・ハミルトン・トムの言説にも見られる。家庭伝道協会における説教において、伝道師たちに貧苦にあえぐ労働者たちを真に救済するためには、彼らの生活のなかに入り、「外には見せない彼らの赤裸々な告白を盗み聞きし」心の内を観察するか、彼らの信頼をかちとり、包み隠さず「本音」を聞き出す必要があることを訴える（Thom, 1849, p.6）。とりわけ一人の人間として愛情をもって労働者たちと接することの大切さを強調する。階級やカテゴリーとして労働者や貧民を扱うのではなく、「心に

たいして働きかける心」、「良心にたいして働きかける良心」を持ち、「人間にたいして働きかける人間」（man [acting] on man）として彼らの家庭を訪問することで、善なる影響を与えることができると主張するのである（Thom, 1849, p.28）。

こうした用語や概念はエリザベス・ギャスケルの小説にも共有されている。登場人物たちは正直さ、真実、率直さ、公平無私の美徳の追究が期待されている。『ルース』のベンスン牧師や『北と南』のマーガレットは世俗的な理由から「嘘」をつくが、それは重大な罪として彼らの良心を苛むことになる。トムが訴えたように、労働者たちを群集ではなく一人の個性をもった人間として小説のなかで描きだしている点は何よりも重要であろう。『北と南』ではマーガレットはヒギンズ家や労働者たちの住居に頻繁に訪れ、彼らの生活と人間性を直に観察する。また、ストライキをする労働者たちがソーントンの家を取り囲んだ際に、警察が来るのをまっているだけの彼に対して、警察の力を借りず、「外に出て、彼らに話しかけなさい、人間として人間に対して話しかけなさい」（go out and speak to them, man to man）と彼女が檄をとばすのも示唆的である（Gaskell, *North and South*, 2005, p.164）。労働者の困窮状態やストライキを女性として描き、ルースのような「堕ちた女」を小説の主人公に据え、労使の対立や組合運動をテーマとすることは、たんなる興味本位の動機で説明できるものではなく、「一人の人間」として労働者たちと「顔と顔を突き合わせ、人間と人間とが対峙」することが「義務」であり、「正しい」とするギャスケル自身の宗教的信条を動機に想定するほうが妥当に思われる。通常「リアリズム」という抽象的なラベルで片付けられてしまう彼女の小説だが、実はそれはユニタリアン信仰の「聖務（ミッション）」として男性伝道師が行う家庭訪問や政治活動ができないかわりに、女性に許容された小説という媒体で労働者たちとの対話を提示してみせた言説と考えるべきであろう（田村 , 2010）。ワーズワスやカーライルなどの文学的影響も見られるが、同時にそこにはユニタリアン・ヴォランタリズムの心性と言説が混在している。労働者たちの「人間の権利」にこだわるマーガレットの発言は、チャーティズムが掲げる政治的権利ではなく、家庭伝道師たちが擁護しようとしたコミュニティにおいて相互依存関係にある「一人の人間」として労働者が保持して

いる人間性に言及していると考えるべきではないだろうか。

3　マンチェスタのヴォランタリズム

エリザベス・ギャスケルが結婚して移り住んだ1832年頃から、マンチェスタにおいてユニタリアン派によるヴォランタリズムが活発になる。審査法・集会法によって国会議員や公務員になれなかったユニタリアンたちだったが、その撤廃、選挙法改正、市制改正によって、この頃から国政や市政の表舞台でも活躍し出す。

功利主義や自由放任主義（*laissez-faireism*）を信奉するユニタリアンたちが多かったことは確かである。ユニタリアン系の新聞雑誌は、政府は暴力と犯罪の抑制（警察）、国家防衛、および個人の資産と生命の保護に専念すべきであり、個人の経済活動、企業活動、生活、教育、世論、信仰、出版、新聞、医療に干渉すべきではないと主張する（Michael R. Watts, 1995, p.489）。『北と南』のソーントンはユニタリアンではないが、彼の中央集権化への反発は、ユニタリアンを含めた北部産業都市の産業資本家の立場を代弁している。労働時間の削減を求めた工場法への抵抗は好例である。グレッグ家、アッシュワース家、マーシャル家などイギリス北部地域のユニタリアン・クエーカー産業資本家たちは、選挙活動やロビー活動によって工場法制定を阻止しようと図る。『リーズ・マーキュリ』、『マンチェスタ・ガーディアン』、『ブラッドフォード・オブサーバ』などユニタリアン派あるいは非国教徒系の新聞も工場法への批判を重ねていく。

自由主義を標榜する産業資本家たちは中央の労働時間規制に一方的に反対したわけではない。彼らは独自の福利厚生制度を労働者たちに提供していた。ウィリアム・グレッグおよびハナ・グレッグは自分たちの綿布工場において労働者たちの友愛組合や住居、寄宿舎、学校などを設立し、エリザベス・ギャスケルの伯父ホランド医師は毎週一回彼らの工場の未成年労働者たちの健康状態をチェックに訪れ、詳細な記録を残している（Sekers, 2013, pp.172-84）。その息子がギャスケルの小説を書評していたウィリアム・ラスボーン・グレッグと兄サミュエル・グレッグであり、ギャスケル夫妻とも懇意だった。ギャスケルはサミュエルがユートピア的な工場経

営を試みて失敗・破産したことについて、その意図を高く評価している（Gaskell, *Letters*, 1966, pp.120-21）。カニンガムはこの二人の兄弟が『北と南』に出てくるソーントンのモデルではないかと指摘する（Cunningham, 1975, p.136）。小説では、工場の福利厚生設備の拡充（スープ・キッチンなど）を試み、最終的には経営に行き詰まってしまう点で近似している。しかし、この時代においてロバート・オーウェンのように企業家たちによる福祉ヴォランタリズムの例は多い。『北と南』のマーガレットは国教会員のままだが、ベル氏の遺産を受け取った後には「村の慈善レディー」（the village Lady Bountiful）（Gaskell, *North and South*, 2005, p.306）にならずに、ソーントンへの投資と結婚というかたちでこうした企業による福祉ヴォランタリズムに関与していくことになる。北部産業都市において自由主義はヴォランタリズムと不即不離の関係にあったのである。

19 世紀初頭まで差別下にあった非国教徒たちは差別撤廃、国教会からの独立を求めて多様な活動を行っていくわけだが、チャリティを含む宗教ヴォランタリズムにもそうした政治的要素は入りこむ。福祉に関して「福祉の複合体」があるように（高田 , 2001, pp.24-42; 高田 , 2006, pp.83-121）、ヴォランタリズムにも複合体を想定すべきであろう。とくに政教分離的な立場から国教会と国家の結託を批判する宗派自立主義（voluntaryism）は、非国教徒たちが関与するさまざまなヴォランタリズムの根幹を支えるイデオロギーであったと考えられる。工場法への反発には、サー・ジェイムズ・グレアムが 1840 年代に試みた国教会の信仰をベースにした学校教育導入の条項への反発も呼応している（Baines, 1843）。自分たちが独自に運営する学校で労働者たちの子女教育を施していた彼らにとって、国教会寄りの教育の強制は思想・信条の自由と宗教活動を損なう抑圧と受け止められたのである。同時にそれは国教会を含めた各宗派が国家とは切り離されて独自に信徒の自発的寄付によって賄われるべきである宗派自立主義の一貫でもあった。社会的弱者をとりこもうとする非国教諸派と危機感を募らせる国教会との見えない軋轢は、工場法や自由貿易、貧困救済など政治・経済問題や奴隷制などの人道的問題などさまざまなレヴェルで生じていた。『オックスフォード英語辞典』においてヴォランタリズム（voluntarism）の用例は 19 世紀のイギリスにはないが

（*OED* 3a）、宗派自立主義（voluntaryism）の初出が 1835 年であり、1845 年のユニタリアン派牧師ジェイムズ・マーティノーの宗派自立についての言説が掲載されているのは（*OED* 1）、ヴォランタリズムの起源の一つにこの時代盛んになる非国境徒たちの宗派自立主義を想定する必要性を示唆していよう。

4　女性のヴォランタリズムと公共圏

エリザベス・ギャスケルがユニタリアン派の平日・日曜学校に関与していたことはよく知られている。それも同派のヴォランタリズムの一つである。男性たちが活躍する政治・経済の領域に対して、「家政」（oeconomy）の延長線上にチャリティ・慈善活動を位置づけていた女性慈善家たちにとって、それは従来の家庭空間あるいは「親密圏」から逸脱しないまま行う社会活動として定義されていた。マンチェスタにおいても、家庭伝道協会や男子学校が男性だけによって運営されていたように、女性たちの社会活動の範囲は男性たちの公共圏とは異質であった。その一方で、キャサリン・グリードルやルース・ワッツが描くような政治的な動きを模索する同時代のより急進的なユニタリアン女性たちの活動も存在した（Gleadle, 1995; R. Watts, 1998）。「分離領域」論では割り切れない女性たちの生活・社会活動領域があり、ユニタリアン派の女性たちは、表向きは男性ヴォランタリズムを補完する役割に位置づけられながらも、複層的な社会活動の領域と親密圏を往来していたのである。ギャスケルの小説には、宗派自立主義とヴォランタリズム、男性ヴォランタリズムと女性の慈善活動との錯綜する力学が潜在している。牧師夫人として教育・啓蒙活動に関与していたエリザベス・ギャスケルにとって、小説は言説を通して社会の正義と真理を問いただしていく重要な宗教的責務の一貫であり、その意味でユニタリアン・ヴォランタリズムと軌を一つにした女性のヴォランタリズム言説と言えよう。

引用文献

Eighth Report of the Ministry to the Poor, Commenced in Manchester, January 1, 1833,

Read at the Annual Meeting, May 31st, 1842. Manchester: Thomas Forrest.

Baines, E.,*The Social, Educational, and Religious State of the Manufacturing Districts*. London: Simpkin, Marshall, and Ward, 1843.

Cunningham, V., *Everywhere Spoken Against: Dissent in the Victorian Novel*, Oxford: Clarendon Press, 1975.

Fryckstedt, M. C., *Elizabeth Gaskell's* Mary Barton *and* Ruth*: A Challenge to Christian England*. Stockholm: Uppsala, 1982.

Gaskell, E., Mary Barton: A Tale of Manchester Life *and William Gaskell, 'Two Lectures on the Lancashire Dialect'*, [Wilkes, J. (ed.), *The Works of Elizabeth Gaskell, Volume 5*], London: Pickering and Chatto, 2005.

———*North and South*. [Jay, E. (ed.), *The Works of Elizabeth Gaskell, Volume 7*], London: Pickering and Chatto, 2005.

———*The Letters of Mrs Gaskell*. (eds.) J. A. V. Chapple and Arthur Pollard, Manchester: Manchester University Press, 1966.

Gaskell, W., *Manchester Unitarian Village Missionary Society,* Manchester, 1843.

———*The Duties of the Individual to Society: A Sermon on Occasion of the Death of Sir John Potter, M.P.*, London: E. T. Whitfield, 1858.

———*Address to the Students of Manchester New College, London, Delivered after the Annual Examination, on June 23rd, 1869*. Manchester: Johnson and Rawson, 1869.

Gleadle, K., *The Early Feminists: Radical Unitarians and the Emergence of the Women's Rights Movements, 1831-51*, Basingstoke: Macmillan, 1995.

Hall, A., *The Beliefs of a Unitarian,* London: Lindsey Press, 1932

Sekers, D., *A Lady of Cotton: Hannah Greg, Mistress of Quarry Bank Mill*, Stroud: History Press, 2013.

Thom, J. H., *Religion, the Church, and the People: A Sermon Preached in Lewin's Mead Chapel, Bristol, September 23, 1849, on Behalf of the Ministry of the Poor in Bristol*, London: John Chapman, 1849.

Watts, M.R., *The Dissenters: Volume II: The Expansion of Evangelical Nonconformity*, Oxford: Clarendon Press, 1995.

Watts, R., *Gender, Power and the Unitarians in England, 1760-1860*, London: Longman, 1998.

Webb, R. K., "The Unitarian Background", Smith, B. (ed.), *'Truth, Liberty, Religion': Essays Celebrating Two Hundred Years of Manchester College*, Oxford: Manchester College, 1986, 1-30.

——— "The Gaskells as Unitarians", Shattock, J. (ed.), *Dickens and Other Victorians: Essays in Honour of Philip Collins*, London: Macmillan, 1988, 144-71.

高田実「『福祉国家』の歴史から『福祉の複合体』史へ――個と共同性の関係史

をめざして」、『「福祉国家」の射程』ミネルヴァ書房、2001 年、23-42 頁。
———「『福祉の複合体』史の語るもの——〈包摂・排除〉と〈安定・拘束〉」(『九州国際大学経営経済論集』第 13 巻、第 1・2 合併号、2006 年、83-121 頁。
田村真奈美「ミッション——女性の使命と作家の使命——」松岡光治編『ギャスケルで読む　ヴィクトリア朝前半の社会と文化』渓水社、2010 年、365-81 頁。